

# 江戸時代における琉球王国の信仰と キリスト教禁止について



17AR146 三島祐華

## 研究の目的

琉球王国は、15 世紀に沖縄本島を中心に統一された王朝である。中国との朝貢貿易によって栄えた独立国家であったが、江戸時代、鹿児島を領有していた島津氏が琉球に進軍し、支配下に入れた。琉球はそのことを中国に報告せず、その後も朝貢関係が続けた。島津氏もそして江戸幕府も琉球－中国の関係を認め、朝貢貿易からの恩恵を受けた。島津氏は琉球を自らの領地として幕府に認めながらも、日本への同化を禁止したのである。つまり琉球王国は、独立国でありながら、中国と冊封関係を保ち、日本からの支配も受けていた。

江戸時代、琉球王国の内部は具体的にどのような支配形態であったのだろうか。そこで注目したのが、琉球におけるキリスト教禁止である。17 世紀初頭に江戸幕府は支配体制を整える中で、キリスト教徒たちが団結して反乱を起こすことを恐れ、キリシタン禁令を徹底した。それは島津氏を通して琉球にも通告された。幕府はキリスト教を禁止するために宗門改めの実施を全国に通知したが、宗門改めの具体的な方法を示さなかったため、地域によってその方法は多様であった。琉球における宗門改めは、木製の札を領民に配布し、それに日付や名前、宗派を書き、キリスト教徒ではないことを証明する方法であった。このやり方は、島津氏からの指示であった。そこで琉球王国と鹿児島藩島津氏の宗門改めを比較することによって、江戸時代の琉球王国は島津氏あるいは幕府からどの程度影響を受けていたのかを明らかにしたいと考えた。

江戸時代初め、日本では、キリスト教徒が多かった天草・島原で大規模な反乱がおこった。琉球にも以前から異国船が来航し、布教活動が行われていたにも関わらず、そうした動きはなかった。その背景として、かねてからの琉球における信仰にキリスト教はそぐわなかったのではないかと考えられる。そこで「御嶽」と呼ばれる琉球における「聖地」を探ることで、琉球独自の信仰形態を明らかにしたいと考えた。

## 期待される効果

① 琉球王国は、島津氏および江戸幕府による支配の影響をどの程度受けていたのかを明らかにできる。

島津氏の宗門改めに関する資料を閲覧し、次に琉球王国が宗門改めの際に使用していた木製の札を調査することで、両者の宗門改めの共通点と違いを探る。

② 琉球王国の独自の信仰形態を明らかにできる。

琉球には「御嶽」と呼ばれる、信仰における祭祀を行う場があった。その土地の祖先神や、先祖を祀っているとされ、遺骨が発掘されることも多い。この地を探ることで、どのような信仰が根付いていたか調査する。また、琉球王国は具体的にどのような祭祀を行っていたのか調査する。合わせて、王家の墓を調査し、日本からの支配を受ける前後を比較し、変化があるかどうかを調べる。

## 日程

2月3日	福岡→鹿児島	黎明館 琉球館跡地
2月4日	鹿児島→沖縄	沖縄県立博物館・美術館
2月5日	沖縄	沖縄県立図書館 護国寺、波之上
2月6日	沖縄	首里城、弁ヶ嶽
2月7日	沖縄	沖縄市立博物館、浦添ようどれ、崇元寺
2月8日	沖縄	斎場御嶽
2月9日	沖縄→福岡	

## 1, 琉球王国の概略

琉球では、11世紀ごろから各地域に按司と呼ばれる長が登場し、勢力争いが起きる。その結果、南山、中山、北山を中心とする三山時代をむかえ、1429年に中山王である尚巴志により統一され、琉球王国が生まれた。

琉球王国は中国に対し冊封体制をとった。15世紀におきたクーデターにより王統が変わるなどの変化を経験しつつ、交易を中心とした政策をとっていた。

日本は17世紀にはいって徳川家康が江戸幕府を開いた。薩摩を支配していた島津氏は將軍の許可を得、琉球に出兵した。王府は薩摩の軍に敗れ、その支配下におかれるようになる。だが、薩摩は王府に対し、中国との冊封体制を続けさせた。中国には薩摩の支配をうけていることを隠したまま、交易の利益を得ようとした。

## 2, 薩摩支配下における体制

### 掟十五か条

薩摩による琉球出兵の際、人質になった王・尚寧が琉球に返還される時にわたされた掟。薩摩の琉球支配における基本方針をまとめている。貿易統制、風俗取り締まり、などが書かれている。

### 仮屋

1631年、薩摩は琉球に、薩摩仮屋を設け、在番奉行を



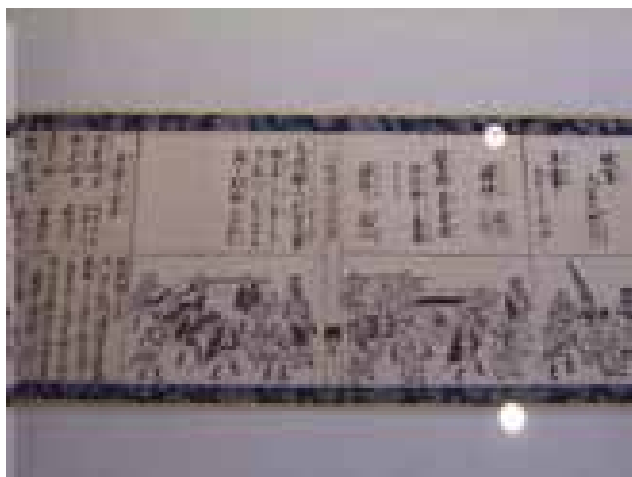
現在の跡地

設置した。奉行の任期は3年、約20人が在勤していた。

鹿児島には琉球仮屋をおいた。1784年には名称が琉球館に変更される。ここは王府の出先機関として機能した。外から中をのぞくことができないようになっており、かなりの警戒態勢がしかれていたようだ。現在は中学校が建っている。

## 江戸立

琉球からは、徳川将軍がかわるたびに慶賀使が、琉球国王が変わるたびに謝恩使が将軍のもとへ派遣された。「江戸上り」といわれることが多いが、琉球では「江戸立ち」という。この際、琉球の人々は中国風の格好をした。これは、幕府が一般市民に対し、異国を支配しているかのようにみせるという権力誇示の狙いがあったとされていた。しかし、話をうかがった学芸員の方は違う見方をしていた。琉球はわざと異国風の格好をすることで独自性をアピールしていたという見方だ。



『琉球人大行列記 大全』沖縄県立博物館・美術館所蔵

## 六諭衍義大徳

元は中国の教訓書。親孝行をすること、年長者を敬うこと、郷里を愛すること、子弟を教育すること、職業に徹すること、悪行をしてはいけないことが書いてある。中国に渡ったことのある程順則（1663～1734）が持ち帰った。これは薩摩に渡り、幕府に献上された。のちに和訳され、寺子屋に使われた。このように、琉球から薩摩・幕府に影響を与えたものもある。

## 琉球国惣絵図

18世紀ごろ、琉球が測量して作成した地図。中国の測量技術を用いた。



かなり正確なものになっている。日本では伊能忠敬が『大日本沿海輿地図』を 1821 年に作成したが、こちらはそれより 80 年ほど前にできた。

#### 『琉球国惣絵図』 沖縄県立博物館・美術館所蔵

#### 異国船対応

##### 異国船打ち払い令

江戸幕府は 1825 年、異国船打ち払い令を出した。欧米諸国の来航の対応として、貿易中の中国・オランダの船以外は打ち払うことを命じた法令だ。

この令は琉球王国には適用されなかった。王府は武力を使わずに追い払う手段をとった。1816 年 9 月、探検・調査のためバジルホールというイギリス人がやってきたとき、琉球は食料を無料で与えた。もしお金をとったら、それは貿易になってしまう。薩摩の目を気にしたのである。王府はわざと食料を少なめに与え、資源が乏しいことをアピールした。バジルホールは航海記録に「大琉球は、貿易からはずれたところに偏在し、島には何ら価値ある生産物がなく、かつ住民も外国物資に対してそれほど興味を示さない」と記録している。



バジルホール『朝鮮西海岸及び大琉球島探検航海記』 沖縄県立博物館・美術館所蔵

##### 薩摩からの指示

1846 年、イギリス船がやってきて、宣教師ベッテルハイムを残して帰ってしまった。薩摩の当時の藩主・島津斉彬は「琉球はこれまで中国と貿易をしているから、欧米の国々と貿易してもさしつかえない。ただしキリスト教は今までどおり禁じたい」と示した。貿易による利益を狙っていたのだろう。そこで薩摩は王府に対し、「なるべく、外国人のきげんをそこなわないように、そして運天港で貿易をやり、薩摩の物産と交換したらどうか」と提案したが、王府は「貿易は断りたい。もし断れなかったら、自国の物産でできるだけのことをしたい。」と答えた。貿易に対するある程度の決定権はあったようだ。

##### ペリー来航

1853 年 4 月、東インド艦隊司令長官ペリーが琉球に来航した。王府は資源の少なさを理由に和親・通商を断ろうとしたが、ペリーは 200 人あまりの軍を率いて首里城に訪

問するという武力行使にでた。

1854年7月11日、王府はペリーと条約を結ぶことになる。それが亜米利加合衆国王国政府トノ通商条約だ。アメリカ船への水、食料、薪の補給、遭難船の救助などが内容だ。だが、王府は人の名前、印鑑を偽造し、条約に効力をもたせないようにした。見事な外交戦略だ。

### 3, キリスト教禁止

---

#### 宗門改

江戸幕府は1612年に幕府直轄領に禁教令を出し、翌年には全国に出した。薩摩藩は1636年に琉球王国に宗門改めの実施を命じた。宗旨に問題がない住民には手札が発行された。これが宗門手札である。手札の表面には所属の地域と村の名前、年月日、調査した担当者の名前が書いてある。裏面には、宗旨、肩書、名前、年齢が書いてあり、焼き印・墨印が押してある。

薩摩と琉球ではどれくらいの頻度で宗門改めが行われていたのだろうか。

薩摩では1635年から1866年の間に30回行われた。琉球には1636年から1866年の間に30回するように指示があった。だが、2回目の1800年は中国から冊封使が来ていたため、翌年実施した。26回目の1838年はフランス人宣教師が、28回目の1845年はイギリス人宣教師・ベッテルハイムが滞在していたため延期され、そのまま実施されなかった。このベッテルハイムは約8年滞在し、聖書を著すなど布教をしようとしたが、王府は彼を厳しく監視し、説話は許さなかった。そのため、キリスト教が広がることはなかった。

### 4, 独自の信仰

---

#### 御嶽

御嶽とは、集落にある村の守護神を祀った聖域のことだ。今回の調査では、王府と関係のある御嶽を調査した。

#### 弁ヶ嶽

1519年に創建され、国王はじめ多くの民衆の拝所であった。航海上の目印にもなった。

首里城正門から歩いて30分くらい位の場所にある。夕方に行ったせいか薄暗く、



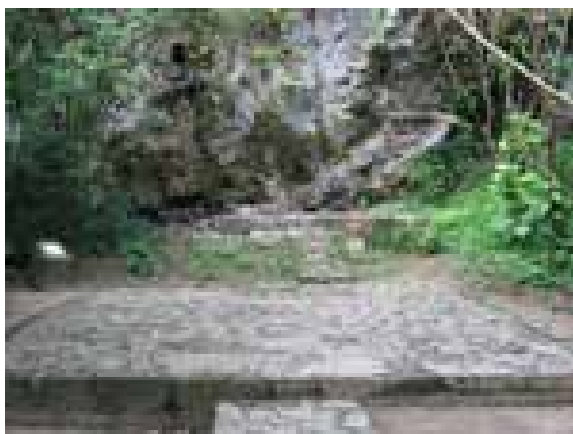
今では心霊スポットの面もあるそうだ。

### 弁ヶ嶽

#### 齋場御嶽

琉球王国最高の聖地。女性の最高神官である聞得大王の就任儀式「御新下り」が行われた。那覇市内からバスで一時間かかる場所にある。入口から奥は王族の一部の者しか入ることが許されず、供の者は入口から御嶽を拝んだ。

中には大庫理、寄満、三庫理という神域があり、首里城内にも同じ名前の部屋がある。三庫理を抜けると、そこから久高島を望める。琉球では久高島の東方にニライカナイという楽土があるとされていた。



大庫理



寄満



三庫理

### 園比屋御嶽

1519年に創建された。国王が外出する際、往復路の無事を祈願する場所だった。聞得大君の御新下り斎場御嶽に行くときの最初の祈願所だった。今はその外観しか見ることができない。首里城からすぐ近くにある

ので、御嶽のなかでは身近なものだったのでないか。



園比屋御嶽

### 女性の立場

斎場御嶽の際に登場した聞得大王とは、琉球の信仰での神女の最高位にあたる人物の呼称だ。国王の姉妹が就任する。彼女は神事を担い、国王と王国を守護する存在であった。国王より力をもつこともあり、1573～1592年に滞在した薩摩僧は、有罪・無罪の司法権は女性祭祀がもっていた、と記録

している。



聞得大王の服装、沖縄県立博物館・美術館所蔵

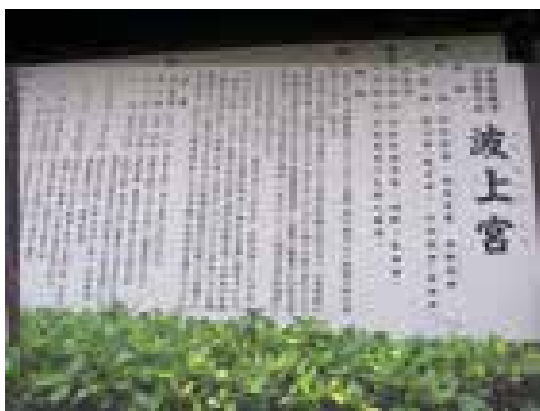
## 5, 神道

琉球には八社と呼ばれる神社があった。位が高い順から、波之上、沖、末吉、識名、普天間、八幡、金武、天久がある。これらは熊野神社の神を移しむかえたものだ。

今回、その中で波之上である波上宮を訪問した。琉球にはニライカナイという、遠い海のかなたにあるとされる楽土があるのだが、ここはそこへの祈りの聖地だった。出入りの船は航海の安全を祈ったという。民衆は大漁・豊穰を祈り、国王も参詣し国家の繁栄と平和を祈った。

日本の通常の神社は氏子がいてそこから集めたお金で成り立っているが、八社は王府から資金援助をうけて成り立っていたので布教なかった。明治以降はその援助がなくなり没落した。

ほかの神社では狛犬がいるところにシーサーがおり、琉球らしさを感じた。





## 6, 仏教

仏教が琉球に入ってきたのは13世紀ごろとされる。このころ浦添村の伊祖にえそにやという按司がいた。伊祖の北に牧港があり、そこには日本の船も出入りしており、物資交換の中心地であった。ここに日本から禅鑑という僧がやってきて極楽寺を建てた。これが琉球での最初の寺だとされる。

琉球王国では、第一尚氏の尚泰久・尚徳と第二尚氏の尚円・尚真がしきりに寺を建てた。(琉球王国ではクーデターにより王統が変わったので、第一、第二と区別されている)



首里城正門から歩いて5分ほどの場所に、円覚寺がある。ここは第二尚氏の菩提寺だ。尚真が父尚円を祀るために建てた。1492年

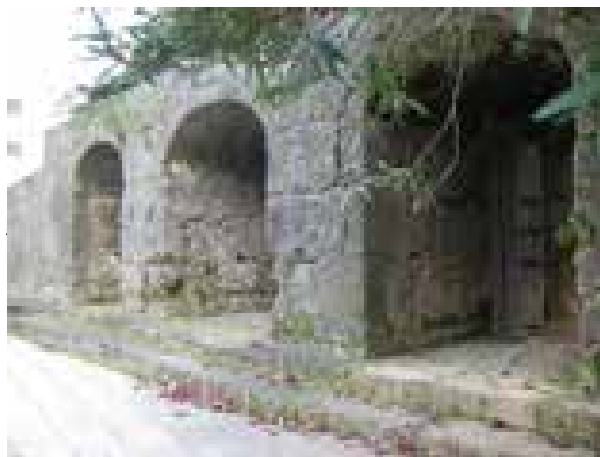


旧円覚寺楼鐘、沖縄円覚寺所蔵

に着工、1494年に竣工した。沖縄県立博物館に旧円覚寺前鐘がある。外側にも仏教にまつわる模様が描かれている。

同じ那覇市内には崇元寺の石門が残っている。1527年に創建された。

この時期はさかんに寺が建てられ、仏教は繁栄していた。だが、薩摩の侵略により、掟十五か条が出されてからは、その内容に寺の造営を禁じた項目があったため繁栄が続くことはなかった。



## 7, 玉陵

玉陵は1501年、尚真が尚円の遺骨を改装するために創建し、第2尚氏の陵墓となった。

琉球では12～13世紀ごろから洗骨が行われていた。いったん岩穴などに遺体を置き、白骨化してから蔵骨器に移していた。そのため、玉陵内には中室という洗骨前の遺骸を

安置する場所、東室という洗骨後の王と王妃のための場所、西室という洗骨後の王子、王女のための場所がある。



左から東室、中室、西室

中は立ち入ることができないが、蔵骨器（石厨子）がある。1572年に亡くなった尚元以降の石厨子には僧形菩薩の模様がある。このことから、琉球において仏教は埋葬文化との関わりが強いのではないだろうか。

また、浦添市にある浦添ようどれも訪問した。ここは英祖と第二尚氏尚寧の墓がある。英祖とは浦添で勢力をもっていた王で、1260～1299年在位した。彼の石厨子にも仏教に関する模様があり、これは沖縄に現存する最古の仏教彫刻となっている。



石厨子

## 8, 日輪双鳳凰文

6,7 章で述べた崇元寺、浦添ようどれには石碑があった。その上部には、日輪双鳳凰文があった。太陽とそのまわりに二羽の鳳凰が描かれている。日輪は国王、鳳凰は聞得大王を指している。古琉球では王のことを太陽神と意味する「てだ」、太陽の子を意味する「てだこ」という名前と呼んでいた。そのため、王と太陽神を同一視する思想があった。だが、この文様は薩摩侵略後見られなくなった。



崇元寺石碑全体



崇元寺石碑上部

### おわりに

江戸時代、琉球王国は江戸幕府のつたものの、中国の文化の影響も受仰の面では独自の文化も残っているように、幕府の属国といかたのではないか。異国船対応で交手腕を発揮しており、独立国家らせている。

キリスト教については、禁止  
行っていたものの、宗門改めは実施しない年もあり、形式的なものであったように思わ



浦添ようどれ石碑上部

浦添ようどれ石碑全体

支配下になれており、信た。江戸立ちう意識は薄は優れた外しい姿を見

はちゃんと

れる。

独自の信仰では、御嶽の存在が大きく、斎場御嶽に見られるように自然と寄り添うようなものだった。外来宗教が入ってくるが独自の信仰は存続した。神道は日本における氏子制度をとらなかったため民間に浸透することはなく、仏教は玉陵に見られるように埋葬文化との関わりが多く見られた。ただ、幕府からの支配下に置かれてからは掟十五か条の影響もあり、衰退したようだ。

#### 参考文献

- 仲原善忠『仲原善忠選集 上巻』沖縄タイムス社、昭和 44  
石川政秀『沖縄キリスト教史』いのちのことば社、1994  
沖縄博物館友の会『王都首里散策』沖縄博物館友の会、2013  
首里城研究会『首里城研究 NO.16』首里城公園友の会、2014  
那覇市教育委員会『玉陵』那覇市教育委員会、平成 17